

## 校内別室を活用した不登校状況の改善事例

### 不登校生徒の状況

対象生徒は、小学校高学年から不登校となった。人と会うことや外出への不安もあり、医療機関では適応障害との診断を受け服薬を継続している。中学校では校内別室の利用を通して、特別支援教室の利用や所属学級での授業への参加回数の増加が見られるようになり、不登校状況の改善につながった。

### 具体的な取組

#### ○不登校対応教室の利用

当該生徒は、中学校 1 年生から、校内別室の利用を開始した。当初は保護者の送迎が必要であったが、支援員との人間関係ができたことで安心して登校できるようになった。その結果、一人での登校や、在席学級での授業に参加する回数も増え、状況の改善につながった。

#### ○支援会議での支援体制の確認

毎週実施した支援会議において、校内別室での様子や所属学級に入った時の様子について共有した。そこでの情報を基に、今後の支援体制について検討を行うだけでなく、当該生徒の興味がある事柄など、教職員が接する際に活用できる有用な情報を得ることもできた。

#### ○特別支援教室の利用

対人関係への不安を低減するため、中学校 2 年生から特別支援教室の利用を開始した。担当教員との人間関係が構築されたことで、当該生徒にとってはコミュニケーションの楽しさを実感し、教職員にとっては当該生徒の率直な気持ちを把握できる機会となった。

#### ○教職員とのコミュニケーション

学年教員から学年の取組や興味のある事柄について会話を重ねる中で、当該生徒が参加したい取組について意思表示を行うことができるようになった。同時に、所属学級で過ごす時間の増加にもつながった。



### 成果

校内別室の利用回数が中学校 1 年生の 3 学期から増え、校内で安心して過ごせる場所となった。2 年生の途中からは、校内別室を利用しつつ所属学級の教室に入る回数が増えるなど、登校に対する前向きな気持ちが見られるようになった。

### 課題

校内別室では、教員による支援体制の構築など学習面の支援が必要である。

## 校内別室を活用した支援について

### 不登校児生徒の状況

対象生徒は、小学校高学年から不登校となり、中学校進学後も登校することは難しかった。中学校 1 年生の 3 学期より校内別室への登校を開始した。教室など、大人数がいる環境や、慣れていない人への不安感が大きい。校内別室利用開始当初はかなり緊張している様子であった。

### 具体的な取組

#### ○支援員による見守りと学習支援

- ・個々の状況や希望に応じた支援で生徒の安心感につなげた。
- ・個別や少人数での学習支援、自習時の見守りを行った。
- ・話し相手、相談相手として生徒に寄り添った。



#### ○他の生徒や地域とのつながり

- ・校内別室利用時に、リラックスして過ごす時間を設定し、別室を利用している他の生徒とのコミュニケーションの機会を設けた。
- ・地域のイベント等を紹介し、校外にも居場所、関わる人を増やしていった。

#### ○教職員とのコミュニケーション

- ・登下校時や給食片付けの際に職員室に来ることにより、教職員とのコミュニケーションの機会とした。
- ・日誌を通して、生徒の様子の把握（今日の調子欄）、必要な連絡、メッセージ、お願いごとなどのやり取りを行った。

#### ○授業・行事等への柔軟な参加スタイル

- ・通常の授業は、「校内別室で授業配信を見る」、「参加できそうな時は教室で参加する」など、当該生徒の希望等に応じて柔軟に対応した。
- ・行事等は、「自席で参加」や「離れたところから見学」など、選択肢を用意した。

### 成果

- ・毎日、安定して登校できるようになった。（給食も校内別室で喫食。）
- ・学習支援で自信がつき、通常の授業に参加できる教科が増えた。
- ・校内別室利用生徒同士で友情を育むことができた。



### 課題

- ・集団への不安はあるため、引き続き、当該生徒の気持ちや願いを把握しながら、在席学級や学年とどのように関わっていくかを検討していく。

## 校内別室における登校支援について

### 不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校入学後登校できていたが、自分の気持ちを相手に伝えることに課題があり、友人関係に対する不安があった。2年生に進級した後、友人との関係に改善が見られず、周囲の様子や行動に対する不安がより大きくなった。その結果、欠席が目立ち始め、そのまま不登校となった。

### 具体的な取組

#### ○自己選択による校内別室利用

担任や学年、保護者と相談して、生徒は校内別室を利用した。校内別室の利用に当たり、登校する日時や給食の喫食等を生徒自身が選択できるようにした。また、取り組む学習内容も選択できるようにした。支援員は、校内別室での生徒の活動に寄り添うなどにより、支援した。

#### ○目的と状況に応じた2部屋の校内別室

自習などの個人の取組を行う教室と、少人数での活動を行う教室の2部屋の校内別室を用意した。生徒自身が目的と自身の状況に合わせてどちらの部屋の活動に参加するかどうかを選択できるようにし、支援員を2人体制にした。

#### ○柔軟な給食の喫食

校内別室を利用する生徒は、希望に応じて校内別室で給食を喫食できるようにした。さらに、在籍学級からの配膳に不安がある生徒は、職員室分の配膳と一緒に受け取れるようにしたことで、学校での滞在時間を午後まで伸ばすことができた。

#### ○支援員の「ミニ講座」

校内別室での支援において、各支援員がそれぞれの得意分野を生かした「ミニ講座」を適宜開設し、生徒が参加を選択できるようにした。コミュニケーションを必要とする活動等を取り入れることで、社会性の向上を図った。



### 成果

支援員との関わりをはじめ、校内別室での支援を通して、生徒の生活リズムや気持ちが安定し、継続的な登校が見られた。また、支援員の体制を整備し、自分の目的や状況に応じて学習を進められるようにしたことにより、在籍学級への復帰も見られた。

### 課題

生徒の状況等に合わせて教室参加や行事参加を進め、校内別室における幅広い支援方法を検討する。

## 様々な状況にある児童への「個に応じた支援」について～特別支援コーディネーターを中心にした組織的な対応～

### 不登校児童状況

対象児童は、他者とのコミュニケーションが苦手で友達との距離感がつかめず、集団の中にいると不安を感じる児童である。家庭と連携を図りながら、特別支援コーディネーターを中心として児童のニーズに沿った別室の活用を進めており、校内別室指導支援員による継続的な支援を続けている。

### 具体的な取組

#### ○教室とのつながりを意識した支援

児童の状況によっては、オンラインで教室とつながりながら、別室で支援員と過ごすようにした。休み時間や給食の時間には、数人の友達が来室し、交流する場を設定した。少しずつ在校時間を延ばしている。

#### ○個に応じた学習環境の整備

校内別室を複数の児童が利用しているため、部屋を分けたり、パーティション等を設置したりした。集団の中にいると不安を感じる児童も、安心して学習できるようになっている。

#### ○保護者と連携した個別指導

学習に不安があったり、授業が分からなくなったりすることで、登校を渋り始めている児童には、保護者と相談しながら個別に学習する時間を設定した。学習への不安がなくなってきた。



#### ○寄り添う支援

一人で教室に行けない児童に対して、支援員が教室まで付き添ったり、児童が集団の中で活動を始めるまで見守ったりするなどして、児童に安心感を与えている。

### 成果

校内別室指導支援員の配置により、不安を抱える児童が安心して学習できる場所をつくることができた。また、支援員との信頼関係により、教室復帰への気持ちも芽生え始めた。

### 課題

別室指導を希望する児童が増えると、別室も小集団化するため、支援員と部屋が複数必要になるため学習環境の整備を進める必要がある。

## 校内別室における登校支援について

### 不登校児童の状況

対象児童は、小学校入学後、半年で登校できなくなった。2年次に転入して、転入後も登校できない日が続いていた。友達や保護者など、他者とのコミュニケーションに課題があり、登校することへの不安があったため、別室での支援を行った。

### 具体的な取組

#### ○校内別室での支援体制づくり

週2日、支援員との学習機会を確保した。特別支援コーディネーターを中心に保護者に連絡した。学習机やホワイトボード等の教具だけでなく、パーティションを設置したことで、不安を和らげることができた。



#### ○会議での情報共有

月2回行っている校内委員会にて、当該児童の様子等について共通理解を図った。また、家庭だけでなく、地域からの支援も得られるよう、学期に1回ケース会議を開いた。子ども家庭支援センターや地域の民生児委員等と共に家庭や児童の様子について情報を共有した。

#### ○支援体制の確認

特別支援コーディネーターが中心となり、当該児童の支援計画を作成した。登校すること、複数の教職員と接すること等、スモールステップで目標を設定し、できることを増やしていった。支援員が、その日の支援内容を日誌に記載し、校内で共有できるようにした。

#### ○コミュニケーション力の強化

支援員や養護教諭だけでなく、担任や専科教員が別室に顔を出すことによって、色々な人とのコミュニケーションを図るようにした。また、クラスの児童が行っている学習と同じ教材や教具を準備し、取り組みやすい学習から学習を進められるようにした。

### 成果

昨年度は、ほとんど登校できなかったが、支援員がいる週2日は登校できるようになった。また、他の日にも登校したり、給食を食べたりすることもできるようになり、他者とコミュニケーションをとる力が身に付いてきた。

### 課題

児童の登校時間が一定ではないため、支援員がいない場合の支援方法の検討が必要である。



## 別室登校による支援の方法について

### 不登校児童の状況

対象児童は、一日を通して教室で過ごせていない状況が一定期間続いており、登校できない日が多くあった。まずは登校すること、次に担任や学級・学年の友達との関わりを増やすことを目指している。別室支援を開始してから、欠席日数は減少し、遅れてでも登校できる日が増えている。

### 具体的な取組

#### ○校内での別室支援体制づくり

週 2 日からスタートした別室支援だったが、支援員を複数人確保し、毎日配置する体制をつくった。いつでも対応できることで、児童が安心して登校できるようになった。日々の別室支援記録を通し、支援員、教員間の情報共有を図っている。

#### ○短期目標の設定

学校行事や学期等、一定期間の短期目標を、当該児童だけでなく保護者も交えて話し合い、それを達成することを目指して別室で過ごすようにしている。

登校した際には、必ず学級へ行って担任に報告し、時間割や取り組む内容について話をするようにしている。

#### ○校内委員会を中心とした支援体制の構築

教員や保護者からの別室利用希望が増えてきたため、校内委員会を中心とした体制に改善した。「在籍学級で普段どおりの生活を送る」という最終目標を再確認し、担任が当該児童や保護者と話し、校内委員会での検討を踏まえて対応する体制を整えた。

#### ○段階的な個々の児童への対応

個々の児童に合わせて、苦手な教科への対応や学習支援を行っている。授業に参加できる時間もあるが、難しい場合は、オンライン授業を通し、別室でも教室と同じ授業が受けられるようにしている。



### 成果

登校することに課題があった当該児童が、別室を利用することで、登校できるようになった（月 10 日以上欠席していたが、月 5 日未満に改善）。

在籍学級で授業に参加できる機会も増えてきている。

### 課題

オンライン授業の活用やパーティションによる学習環境の整備を進め、別室での複数学年の学習指導の充実を図る。